

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

松本県ヶ丘高校 2 位 大ちゃん、おめでとう

極めて、個人的な思いも併せながら記述するのをご容赦願いたい。8月6日、大分県竹田市の竹田高校体育館で行われたインターハイの閉会式。僕は役職上、ステージの壇上に座っていた。岩澤審査員長が入賞校を6位から順に発表していく。

「第2位、長野県松本県ヶ丘高等学校」と告げられた瞬間、壇上から会場中央に近い県ヶ丘の座席を見る。松田さんも僕の方をちらっと見て、お互いこうなずき合った。直後松田さんが、2列前に座っている生徒たちのところへ寄っていく。まさかという思いと、やったという思いの交錯した満足げな生徒たちの労をねぎらうために……。

長野県内では圧倒的な指導力で、大町高校時代から通算して13連覇を遂げた松田さんだが、ついに全国でも優勝校の下松工業にわずか0.4点差の2位という素晴らしい結果を勝ち取った。そんな素晴らしい生徒を育て上げたその手腕には心から敬意を表したい。県ヶ丘の生徒たちとは、個人的には池工と合同合宿を組んだり、山岳総合センターの研修会で指導をしたりと皆一年のころから顔見知りの生徒たちでもある。一方、松田さんとは顧問同士という関係だけではなく、信高山岳会のメンバーとして最も気が置けない山仲間である。海外遠征も一緒にし、僕にとって一緒に登山をした回数のもっとも尊敬すべき山仲間である。今回のインターハイの前には一緒に大分入りし、一部は同宿、下見も同行した。その生徒たちが目の前で梶本全国高体連登山専門部長から賞状を授与され、神崎日山協会長からメダルを授与される瞬間、不覚にも僕の涙腺は緩んでしまった。ここでは公表は差し控えるが、松田さんにとってこの大会にかけるものは、強いものがあつたはずである。大ちゃん、本当におめでとう。心からお祝い申し上げます。

九州で目いっぱい楽しんできました その1

大分県でインターハイが行われた。A隊松本県ヶ丘高校監督の松田さんから「どうせ役員として行くんだし、下見を少し手伝ってくれない？」とリクエストがあつた。九州の山は、屋久島以外登ったことがなかったが、役職上大会期間中は本部で缶詰になるのはわかっているので、どの道早く九州入りしていくつかの山は登ろうとは考えていたので、「僕は僕として登りたい山に登るが、一緒に活動できたり多少便宜を図ったりできる部分は協力するよ。」と、ちょっと早めの7月27日早朝にフェリーで九州入りした。

自分なりにいくつかの課題を課してできる限り多くの山に登ろうと考えた。(結果的にはただのピークハンターへの後付けの論理と言えなくもないのだが……) その課題とは、ただ登るだけでなくその山のよさが感じられるルートで登ること。できれば同じコースをピストンするのではなく、別ルートで下山すること。可能であれば一日に複数の山に登り、自分自身の限界にも挑戦すること。そして何よりケガや病気をしないこと。

27日は県ヶ丘高校の選手とともに、大船山に登った。天気はまずまずで、山頂から見下ろす緑のじゅうたんが敷き詰められたような坊ガツル、懐の広さを感じさせられる独特の景観をもって重畳たる峰々の続くくじゅうの山々を眺め、本州とは違う僕の連続登

山が始まった。九州本土初の山頂は、九州の山のよさを予感させるに余りあるものだった。ところが、下山して最後の舗装道路を歩いているときに、癖になっている左足を捻挫してしまった。しまったと思ったが、後の祭り。大体平地の何でもないところでいつも僕の左足はガクッとくずおれる。靭帯が何度も伸び、ギプスも3回巻いている左足。重篤でないことを祈りながら、湿布をして、次の目的地の開聞岳を目指した。開聞岳の登山口までは竹田市からは熊本を経由して330km。同じ九州とはいえ、松本から京都までの移動距離と同じである。暗くなった登山口の開聞ふれあい公園で車中泊をしながら、左足の回復を祈った。

28日4時半、まだ暗いうちにヘッドランプをつけて歩き出す。左足は痛い、テーピングを巻いて靴紐をしっかり締めて固定した。なんとか歩けそうだ。ムシムシする暑さの中、同じ勾配で標高を稼いでいく。登山口の2合目から3合目、4合目と刻んでいるところは足元の町の明かりも見えて、山頂の景色が期待された。ところが6合目あたりから足元が湿り、木々の葉には雨滴が付いていた。登るにつれ湿度は高くなり視界も閉ざされ、期待した眺望は望み薄。雨にこそ遭わなかったが、湿度100%、眺望0%。残念ながらアリバイ作り登山になってしまった。6合目までの濡れた岩を慎重に下り、乾いた石に乗った瞬間だった。再び左足をギクッと捻った。南無三、これで終わりかと一瞬間いたが、しばらくその場で痛みをこらえていると何とか痛みは治まった。少し足をひきずりながら、下っていくと地元の子どもたちが100名ほど登って来た。引率のガイドに聞くと、ここ数日毎日こんな天気では湿っぽいとの由だった。下から望む開聞岳は、大きな裾野の山だったが、山頂は厚い雲に覆われてみることはできなかった。登山終了は7時40分。

上から下まで湿度と汗でぐっしょりになった服を着替えて、この日二つ目の目的地の韓国岳に向かう。途中鹿児島市を通過する頃大粒の雨、足の痛さとこの雨で気も萎えた。移動に意外と手こずり、登山口の「えびの高原」に着いたのは10時30分。上の方がガスってはいるものの、時折切れ間から頂上が見え隠れしている中、10時50分に歩き出す。遊歩道のような登山道なので、捻挫している足でもなんとか登れる。加えて痛みが治まって来た。しかし、山頂に着いた時には厚いガスに覆われ、ここでも全く眺望はなし。一体なんのために登っているんだろう……。そんな思いを持ちながら下山は大浪池の方を回り一応縦走することにする。延々と続く木道の階段にやや辟易しながら大浪池まで下った後、池を望み下ろす火口壁まで登ったが池はガスの中。お鉢めぐりは諦めて登山口まで降りたのは、13時22分。一応ミニ縦走形式の登山をした。

その後、本日最後の高千穂峰に向かう。新燃岳は相変わらず登山禁止で、韓国方面からの縦走はできないので、車で回り、高千穂河原へ着いたのが13時50分。駐車場で念のため、「今から登りたいが大丈夫でしょうか？」と訊ねると、「天気も悪いので気をつけて行ってください。もし危険だと感じたらすぐに下山してください。」とアドバイスされた。天孫降臨の伝説のある広場の横からしばらく進むと富士山の下山道のようなザクザクの歩きにくい道が続いていた。しかし歩きにくい分、足元が柔らかいので、痛めた足には優しいのか、いつの間にか朝の痛みが嘘のように治まり、登る分には不便を感じなくなっている。お鉢の上に出ると風が強く、見通しもなくなった。本日の山はどれも上部はガスに閉ざされている。いったん尾根続きの鞍部まで下り、さらに20分ほど登り詰めると、15時12分に山頂に到着した。(以下、次号に続く)